

# 『新後撰和歌集』伝本考

中 條 敦 仁

## 一、はじめに

『新後撰和歌集』（以下、『新後撰集』と表記）の伝本に関する研究は、

- 1 浜口博章氏「新後撰和歌集本文校定私按」<sup>〔1〕</sup>
- 2 久保田淳氏『吉田兼右筆十三代集 新後撰和歌集』解説<sup>〔2〕</sup>  
があげられる。

1は、正保版本と書陵部蔵本四種（四〇〇・七、四〇〇・一〇、四〇三・一二、五一〇・一三）を対象とし、本文校訂結果を示し、2は、宮内庁書陵部蔵兼右筆本（五一〇・一三）、尊経閣文庫蔵伝蜷川新右衛門尉親元筆本及び版本（流布本）を対象に、歌の所収状況から三種伝本の関係を明らかにされ、尊経閣文庫本は注目すべき古写本

であることを指摘している。しかし、1・2とも現存伝本の整理・分類・系統論立てといったことは行っていない。『新後撰集』伝本の整理・分類の指針となるものとしては、『十三代集異同表―歌の出入り作者名及び詞書中の主要語句について―』、『勅撰集系統判別便覧』がある。両書とも近年目に触れる機会が少なくなったが、伝本間の歌の所収状況の異同、詞書・作者表記異同をもとに伝本分類の一基準を示している。しかし、両書とも調査対象伝本が少なく、系統論にまでは至っていない。

この現状をみるに、『新後撰集』伝本研究は遅れていると言わざるを得ない。そこで本稿は、『新後撰集』現存伝本の整理・分類と系統立てをすることを第一の目的とする。その上で、伝本研究上の問題点について述べておく。

## 二、調査対象伝本

現存伝本は非常に多い。今回は、

- (一) 先学によってすでに調査・報告がなされているもの
- (二) 国文学研究資料館にマイクロフィルムとして収められているもの
- (三) 稿者が文庫、図書館などで調査し得たもの

の三点から、二十二種の現存伝本の調査ができた。以下に、系統分類結果（大別、三類に分類できる）をも含め調査伝本の一覧を掲出する。掲出にあたり、「1」→「9」の順で各伝本の情報を示す。また、書誌等調査によって

知り得た情報がある場合は《書誌情報》としてあげ、新編国歌大観本に比して脱落・排列の異同が認められる場合は、《収録状況異同》としてその異同状況を新編国歌大観番号により示す（「収録状況異同」中の「詞」は詞書、「作」は作者、「歌」は和歌を示す。また、〽は細書補入を表す）。さらに、奥書等ある場合は《奥書》として示す。

- [1] 伝本所蔵者（函号） [2] 刊写、冊数 [3] 書写者・書写年次 [4] 総歌数<sup>5)</sup>  
[5] 二十一代集所収本か単独本か [6] 国文学研究資料館蔵マイクロフィルム請求番号  
[7] 同紙焼本請求番号 [8] 分類表中略号 [9] 備考

○第一類（草稿本系統本）

【第一種】

- 1 [1] 尊経閣文庫（363・2） [2] 写二帖 [3] 伝蟻川新右衛門尉親元筆・室町中期  
[4] 一六一二首 [5] 二十一代集所収本 [6] 296-905-15 [7] C11947 [8] 【尊経A】  
[9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《書誌情報》二六種×一七種。列帖装。本文料紙は鳥の子紙。（新編国歌大観・解題による）

《収録状況異同》

【上冊】 1→279→281→389→391→477→479→478→480→549→③→550→593→④→594→669

↓ ⑤ ↓ 670～769。

〔上冊〕 770～789 → ⑨ → 790～835 → 837～1103 → ⑩ → 1104～1221 → ⑫ → 1222～1329 → ⑬ → 1330～1607。

《奥書など》

\* 箱表書：「蜷川新右衛門尉親元」〔新後撰和歌集／全部 二冊〕

\* 折紙極Ⅰ：「折紙表紙に「蜷川新右衛門尉親元」〔新後撰和歌集／全部二冊極札〕

極札Aに「新後撰集二冊巳未二〔琴〕」

極札Bに「蜷川新右衛門尉親元」〔新後撰和歌集／全部二冊〕〔琴山〕

\* 折紙極Ⅰ：「折紙表紙に「蜷川親元 新後撰集 極札 了祐」

極札Aに「新後撰集「全部／御半本」二冊庚申五〔琴〕」

極札Bに「蜷川新右衛門尉親元」〔新後撰和歌集／全部二冊〕〔琴山〕

2 [1] 陽明文庫(近・53・5) [2] 写一帖(上冊のみの残欠) [3] 室町末期か

[4] 上冊のみ七五四首 [5] 単独 [6] 55-132-2 [7] C4450 [8] 【陽明A】

《書誌情報》二四・七種×一六・四種。列帖装。本文料紙は鳥の子紙。表紙は赤茶色無地。近衛家伝来本。

本文一面一〇行、一首一行書き。詞書二字下げ。上冊のみの残欠本で、下部破損で状態悪し。

《収録状況異同》

[上冊] 1～185→187→186→188→279→281→477→479→478→480→484→492 [歌]→537→538 [詞一巻]→547→549→㉓→550→559→561→560→562→593→㉔→594→769。

【第二種】

3 [1] 内閣文庫 (200・78) [2] 写二冊 [3] 不明 [4] 一六一四首 [5] 単独

[6] 19-101-2 [7] C3451 [8] 【内閣】 [9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《収録状況異同》

[上冊] 1～549→㉓→550～593→㉔→594～669→㉕→670～769。

[下冊] 770～789→㉖→790～1103→㉗→1104～1221→㉘→1222～1329→㉙→1330～1356→1358→1357→1359～1607。

4 [1] 今治市河野美術館 (101・6882) [2] 写二帖 [3] 室町末～江戸初期

[4] 一六〇五首「連続脱落による」 [5] 二十一代集所収本 [6] 73-261-1-13 [7] ナシ

【8】【河野】

《書誌情報》二三・八糎×一七・〇糎 (左肩題簽 一四・一糎×三・〇糎)。列帖装。本文料紙は鳥の子

紙。表紙は栗皮色金箔霞に菊花紋。本文二面二〇行、一首二行書き。詞書三字下げ。

《収録状況異同》

[上冊] 1～549→㉓→550～593→㉔→594～669→㉕→670～769。

[4冊] 770～789 → ⑥ → 790～827 [作] → 836～1103 → ⑩ → 1104～1221 → ⑪ → 1222～1329 → ⑬  
→ 1330～1607。

5

- [1] 国立歴史民族博物館《旧高松宮》(も12) [2] 写二冊 [3] 江戸初期～中期頃か  
[4] 一六一一首 [5] 二十一代集所収本 [6] 21-145-1-12 [7] C661 [8] 【歴博】  
[9] 原本未見・資料館マイクログによる。

《収録状況異同》

[上册] 1～279 → 281～477 → 479 → 478 → 480～549 → ② → 550～559 → 561 → 560 → 562～※593  
→ ④ → 594～769。

[下册] 770～789 → ⑨ → 790～835 → ※836 → 837～1103 → ⑩ → 1104～1155 → 1157 → 1156 → 1158  
→ 1329 → ⑬ → 1330～1607。

★注↓【※】を付した593番歌右肩に「本無」の注記あり。また、836番歌右肩「追入」の注記あり。

6

- [1] 宮内庁書陵部(403・12) [2] 写二帖 [3] 山田隠士冬木翁筆、江戸初期  
[4] 一六〇八首 [5] 二十一代集所収本 [6] 20-271-2-13 [7] ナシ [8] 【書陵冬】  
[9] 原本未見・資料館マイクログによる。

《収録状況異同》

[上册] 1～669 → ⑤ → 670～769。

〔下冊〕 770～1221 → ㉔ → 1222～1329 → ㉕ → 1330～1348 → 1349 [詞・作] → 〈1349〉 [歌] → 〈1350〉  
[詞・作] → 1351～1607。

《奥書など》

本集卷末等に奥書はないが、『新統古今和歌集』の卷末に、「寛文七年九月後拾遺上卷／寛文八年正月新統古今上／下巻書之／山田隠士 冬木翁「花押」とある。

○第二類 (流布本系統本)

7 [1] 東京大学文学部国文学研究室(中世11・6・3) [2] 写一冊 [3] 未見のため不明

[4] 一六一二首 [5] 単独 [6] 464-1 [7] C3149 [8] 【東大】

[9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《収録状況異同》

1～279 → ※280 → 281～789 → ※⑨ → 790～923 → ※⑧ → 924～1047 → ※⑤ → ※⑩ → 1048～1104  
→ ※⑪ → 1105～1607。

★注 ↓ 「※」記号を付した⑥⑧⑨⑩は、その歌の右肩に「校本ニナシ」という注記あり。

8 [1] 蓬左文庫(164・2) [2] 写三帖

[3] 伝智仁親王(天正七(1579)生—寛永六(1629)没)・江戸初期 [4] 一六一一首

『新後撰和歌集』伝本考

[5] 二十一代集所収本 [6] 48-95-118 [7] ナシ [8] 【蓬左】 [9]

《書誌情報》二三・五種×一六・九種（中央題簽 一四・四種×三・二種）。列帖装。本文料紙は鳥の子

紙。表紙は絹表紙金糸刺繡草花紋。尾張徳川家伝来本。本文一面一〇行、一首一行書き。詞書

三字下げ。『古今集』表紙貼付紙片に「八條宮親筆二十一代集 鑑正」「八條宮智仁親王二十一  
代集全部」とあり。

《収録状況異同》

【上冊】 1～213 → 214 【詞】 → 215 【作・歌】 → 216～531。

【中冊】 532～789 → ⑨ → 790～923 → ⑩ → 924～1047 → ⑪ → ⑫ → 1048～1051。

【下冊】 1052～1104 → ⑬ → 1105～1607。

9 [1] 正保四年版本 [2] 版三冊 [3] 吉田四郎右衛門版・正保四年 [4] 一六一二首

[5] 二十一代集所収本 [6] 数本あり [7] 数本あり [8] 【正版】

[9] 国文学研究資料館所蔵版本による。

《収録状況異同》

【上冊】 1～552。

【中冊】 553～789 → ⑨ → 790～923 → ⑩ → 924～1047 → ⑪ → ⑫ → 1048～1104 → ⑬ → 1105～1113。

【下冊】 1114～1607。



《奥書など》

本集の巻末に奥書などはないが、『新続古今和歌集』巻末に、「正保四年<sub>丁</sub>曆／三月中旬 開板／中  
御門通弱檜木町／吉田四郎右衛門尉「印」とあり。

10 [1] 無刊記版本「小型版本」 [2] 版二冊 [3] 正保四年以降 [4] 一六一二首

[5] 二十一代集所収本 [6] 数本あり [7] 数本あり [8] 【無版】 [9] 架蔵本による。

《収録状況異同》

〔上冊〕 1～769。

〔下冊〕 789 → ⑥ → 790～923 → ⑧ → 924～1047 → ⑨ → ⑩ → 1048～1104 → ⑪ → 1105～1607。

11 [1] 国文学研究資料館「福田秀一氏旧蔵本」(ア2—10—1550) [2] 写二冊

[3] 江戸中・後期か [4] 一六一三首「重出歌一首あり」 [5] 二十一代集所収本

[6] 71-3-1-13 [7] ナシ [8] 【国資】

《書誌情報》二二・八糎×一六・七糎(左肩題簽 一九・〇糎×三・四糎)。袋綴。本文料紙は楮紙。表  
紙は紺色無地。本文二面十一行、和歌一首一行書き。詞書二／三字下げ。

《収録状況異同》

〔上冊〕 1～332 → <333> [細書] → 334～739 → 741～769。

〔下冊〕 770～789 → ⑨ → 790～828 → 829 → 829 [重出] → 830～923 → ⑩ → 924～1047 → ⑪ → ⑩

→1048～1104 →⑩→1105～1126 →〈1127〉【細書】→1128～1607。

《奥書など》

上冊末に貼紙に、「後宇多院 正安三年辛丑十一月廿三日／新後撰集廿卷 前大納言為世卿撰 第十三」とあり。

12 [1] 尊経閣文庫(363・5) [2] 写二帖 [3] 原本未見のため不明(江戸中期以降か)

[4] 一六一二首 [5] 二十一代集所収本 [6] 296-905-16-13 [7] C11948

[8] 【尊経B】

《収録状況異同》

[上冊] 1～789 →⑥→790～923 →⑧→924～1047 →⑨→⑩→1048～1051。

[下冊] 1052～1104 →⑪→1105～1607。

13 [1] 宮内庁書陵部(C1・97) [2] 写三冊 [3] 江戸中・末期か [4] 一六一〇首

[5] 二十一代集所収本 [6] 20-293-2-13 [7] ナシ [8] 【書陵A】

[9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《収録状況異同》

[上冊] 1～184【詞・作】→184【歌、初～四句】+185【五句】→186～189 →〈190〉→〈191〉【作】→  
191【歌】→192→258→259【作】→260【歌】→261～552。

[中冊] 553～789 → ⑨ → 790～923 → ⑧ → 924～1047 → ⑥ → ⑩ → 1048～1104 → ⑪ → 1105～1113。  
[下冊] 1114～1607。

14 [1] 鹿児島大学附属図書館玉里文庫(天36・494) [2] 写三冊 [3] 伝藤原純応・江戸末期

[4] 一六一一首 [5] 二十一代集所収本 [6] 91-116-2-21 [7] ナシ [8] 【玉里】

[9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《収録状況異同》

[上冊] 1～258 → 259 [作] → 260 [歌] → 261～552。

[中冊] 553～789 → ⑨ → 790～923 → ⑧ → 924～1047 → ⑥ → ⑩ → 1048～1104 → ⑪ → 1105～1113。

[下冊] 1114～1607。

15 [1] 桑名市立博物館(248・030100095) [2] 写二冊

[3] 松平定信(宝暦八(1758)年生—文政一二(1829)年没)・文政七(1824)年九月廿五日

—十月廿日

[4] 上句・下句脱落・重出多く総歌数算出不可 [5] 十三代集所収本 [6] 70-29-1-5

[7] C3738 [8] 【桑名】 [9] 五種×五種の豆本で、詞書・作者の表記は無く、和歌本文のみ。

《書誌情報》五・八種×五・五種(左肩題簽 三・九種×八・六耗)の豆本。袋綴。本文料紙は楮紙。表

紙は卯花色無地。本文二面九行、和歌一首二行書き。詞書は書かれていない(和歌のみの書写)。

《収録状況異同》

【上冊】 1～100 [上段] → 101～219 → 229～284 → 287～297 → 298 [上段] → 299 [上段] → 300～403  
 → 405～452 → 454～495 [上段] → 499 [上段] → 500～506 → 507 [上段] → 508～512 → 513 →  
 514 → 513 [重出] → 514 [重出] → 515～518 → 519 [上段] → 528 [上段] → 529～543 → 543  
 [重出] → 544～556 → 557 [上段] → 558～581 → 584～607 → (釈教全脱落) → 714 → 731 [上  
 段] → 732～741 → 743～758 [上段] → 759～764 → 765 → 764 [重出] → 765 [重出] → 766～  
 769。

【下冊】 770～789 → ⑨ → 790～795 [上段] → 804 [上段] → 805～911 → 922 → 923 → ⑩ → 924～970  
 → 972～1047 → ⑪ → 1048～1104 → ⑫ → 1105～1147 → 1147 [重出] → 1148～1284 → 1284  
 [重出] → 1285～1371 → 1373～1570 → 1572 → 1573 → 1575～1607。

《奥書など》

卷第八・鞆旅歌卷末(卷第十・神祇の前)に「釈教哥例のことし」上冊末に、「新後撰上／七年七  
 月六日よりして／十五日におふ」下冊末に、「文政七年 楽翁／新後撰下／七月十六日より始めてけり」  
 とあり。

○第三類（精撰本系統本）

〔第一種〕

16 [1] 小保内道彦「稻荷文庫」(123) [2] 写二冊 [3] 原本未見のため不明

[4] 一六〇七首 [5] 単独 [6] ㄱ5-35-4 [7] ナシ [9] 【小保】

《収録状況異同》

〔上册〕 1～769。

〔下册〕 770～1607。

17 [1] 多和文庫(11・1) [2] 写二冊 [3] 原本未見のため不明

[4] 一五八八首「連続脱落あり」 [5] 単独 [6] 271-149-3 [7] C10479

[8] 【多和】 [9] 原本未見・資料館マイクログロによる。

《収録状況異同》

〔上册〕 1～242 → 244～279 → 281～466 → 477～549 → ㊸ → 550～566〔作〕 → 567～635〔作〕 → 643

〔歌〕 ～669 → ㊹ → 670～694 → 696～769。

〔下册〕 770～775 → 776～1378〔作〕 → 1387〔歌〕 ～1585 → 1587～1607。

18 [1] 宮内庁書陵部(400・7) [2] 写二帖 [3] 江戸初期 [4] 一六〇五首

[5] 二十一代集所収本 [6] 20-265-2-13 [7] ナシ [8] 【書陵B】

『新後撰和歌集』伝本考

[9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《収録状況異同》

[上冊] 1～242 → 244～279 → 281～669 → ㊟ → 670～717～769。

[下冊] 770～1056 → 〈1057〉 [細書] → 1058～1584 → 1585 [詞・作] → 1585 [歌] 初～三句 + 1586  
[四・五句] → 1587～1607。

【第二種】(精撰本)

19 [1] 陽明文庫(近・5<sub>3</sub>・5) [2] 写一帖 [3] 江戸中期 [4] 一六〇六首

[5] 単独 [6] 55-132-3 [7] C4451 [8] 【陽明B】

《収録状況異同》

1～279 → 281～1607。

《書誌情報》二四・九纏×一六・五纏(左肩題簽 九・三纏×二・二纏)。列帖装。本文料紙は鳥の子。

表紙は赤茶色無地。近衛家伝来本。本文一面一〇行、和歌一首二行書き。詞書二字下げ。

20 [1] 宮内庁書陵部(508・208) [2] 写一冊 [3] 飛鳥井雅章筆・正保三年頃

[4] 一六〇六首 [5] 二十一代集所収本 [6] 20-375-1-137 [7] ナシ [8] 【書陵雅】

[9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《収録状況異同》

1～279 → 281～1607。

《奥書など》

卷末に、「右依 勅定披数多之旧本加用捨励／書写之微功遂校合者也／文明十三年三月十六日／從二位藤原教国」という文明新写の禁裏官庫本に付された奥書の転写があり、続いて「此新後撰和歌集以滋野井／教国卿自筆之本往々遂／書写之微功訖件本者／官物也／並槐藤「花押」という雅章識語がある。雅章識語の次に貼紙があり「墨付二百七枚」とある。

21 [1] 宮内庁書陵部 (510・13) [2] 写一帖

[3] 吉田兼右・室町後期 (天文十四 (1545) 年から二十四年) [4] 一六〇六首

[5] 二十一代集所収本 [6] 20.375.1.13 [7] ナシ [8] 【書陵兼】

[9] 原本未見・資料館マイクロによる。

《書誌情報》二四・〇纏×一五・八纏。列帖装。本文料紙は鳥の子紙。(新編国歌大観・解題による)

《収録状況異同》

1～279 → 281～1607。

《奥書など》

卷末に、「右依 勅定披数多之旧本加用捨励／書写之微功遂校合者也／文明十三年三月十六日／從二位藤原教国」という文明新写の禁裏官庫本に付された奥書の転写があり、続いて「天文十九年六月

十一日以禁裏御本遂書功了 ト兼右」という兼右識語がある。

○位置づけ不可能

22 [1] 武雄市教育委員会鍋島文庫 [2] 写一冊(下冊のみの残欠) [3] 原本未見のため不明

[4] 下冊のみで八三八首 [5] 単独 [6] 31-24-5 [7] C950 [8] 【鍋島】

[9] 原本未見・資料館マイクログによる。下冊のみの基準歌の所収状況を見ると、第三類「第一種」か「第二種」に属すと考えられる。

《収録状況異同》

[下冊] 770～1607。

### 三、分類基準歌と各伝本の基準歌所収状況

以上、二十二種伝本を分類するにあたり基準とした歌十三首をあげる。各伝本における基準歌十三首の所収状況により分類をおこなった。

※〔場所〕↓所収巻部立・新編国歌大観番号と後掲出表中記号(↓○、↓●等は系統分類表等に対応)。「重出」↓先行勅撰集に既出の場合の勅撰集名と新編国歌大観番号。



(秋歌の中に)

平宣時朝臣

① たれか又秋風ならでふる郷の庭の浅茅の露もはらはん

※〔場所〕卷第四・秋上・二八〇 〔重出〕／ 〔備考〕／

(題しらず)

藤原重綱

② ながめきてはては老とぞ成りにける月はあはれといはぬものゆゑ

※〔場所〕卷第五・秋下・三九〇 〔重出〕／ 〔備考〕／

あづまへくだりけるに

祖意法師

③ 此たびは帰りこむともいそがれずいなばの山のまつ人もなし

※〔場所〕卷第七・離別・五四九次(一六一三) 〔重出〕／ 〔備考〕／

宝治百首歌めしけるついでに旅行

後嵯峨院御製

④ かぎりなくとほく成りゆく都かなすみだ河原のわたりしてけり

※〔場所〕卷第八・羈旅・五九三次(一六一四) 〔重出〕／ 〔備考〕／

歡喜至一念、皆当得生彼

彰空上人

⑤ 一声もかかるうき身にうれしきはすてぬ仏のちかひなりけり

※〔場所〕卷第九・釈教・六六九次(一六一五) 〔重出〕／ 〔備考〕／

(名所百首歌たてまつりける時)

僧正行意

⑥ おのづからかけても袖にしらすなよいはせの杜の秋のしら露

※〔場所〕巻第十一・恋一・七八九次（一六〇八）〔重出〕続拾遺集・八一七〔備考〕／

（宝治元年十首歌合に忍久恋）

紀淑文

⑦ よしさらは袖のなみだはもらばもれたれゆゑとだに人のしらすは

※〔場所〕巻第十一・恋一・八三六〔重出〕／〔備考〕／

千五百番歌合に

二条院讃岐

⑧ 富士のねも立ちそふ雲はあるものを恋のけぶりぞまがふかたなき

※〔場所〕巻第十二・恋二・九二三次（一六〇九）〔重出〕続古今集・一〇七八〔備考〕／

（題しらす）

順徳院御製

⑨ 浜千どりかよふばかりの跡はあれどみぬめの浦にねをのみぞ鳴く

※〔場所〕巻第十三・恋三・一〇四七次〔重出〕／〔備考〕⑨⑩は二首連続してあり

（題しらす）

（順徳院御製）

⑩ 我がせこを松浦の山の葛かづら玉さかにだにくるよしもなし

※〔場所〕巻第十三・恋三・一〇四八前〔重出〕続古今集・一一一七〔備考〕⑨⑩は二首連続してあ

り

（恋歌の中に）

賀茂重員

⑪ よなよなの枕のちりによそへてもしらせやせましつもる恨を

※〔場所〕卷第十四・恋四・一一〇三次↓〇 一一〇四次↓● 一一〇四次小字書入↓△ (二六一二)

〔重出〕／ 〔備考〕伝本により所収場所異なる

性助法親王家五十首歌に

前参議雅有

⑫ 帰る雁たがならはしのつらさより都の春に別れそめけむ

※〔場所〕卷第十七・雑上・一二二一次(二六一六) 〔重出〕／ 〔備考〕／

(冬歌の中に)

右兵衛督基氏

⑬ むばたまのよはの枕におく霜のかさなるままに身こそふりぬれ

※〔場所〕卷第十七・雑上・一三二九(二六一七) 〔重出〕続古今集・一六〇〇 〔備考〕／

基準歌一三首のうち、⑥⑧⑩⑬は先行勅撰集に既出の歌である。次に基準歌一三首の各伝本における所収状況を表によって示す(系統分類表)。

### 【系統分類表】

凡例

・「尊経A」「陽明A」などの略号は、「二、調査対象伝本」に示した略号に一致する。

『新後撰和歌集』伝本考

・表中の記号について

- ↓ 基準歌が存在していることを示す。
- ↓ 基準歌は存在するが、○位置とは異なる位置に存在していることを示す。
- × ↓ 基準歌が存在していないことを示す。
- △ ↓ 基準歌が細書補入・イ本細書補入を示す。
- ▲ ↓ 基準歌が細書補入・イ本細書補入されているが、△位置とは異なる位置に細字書入・イ本細字書入されていることを示す。
- 追 ↓ 基準歌の頭や右肩に「追入」「追被入之」等の注記があることを示す。

【 — 系統分類表は次頁 — 】

系統分類表をみると、先行勅撰集に既出している⑥⑧⑩⑬を一首も含まない第三類第二種が精撰本と位置付けられる。第三類第二種を基本とし、各系統の特徴と位置付けを示す。

第一類に属す伝本は現在【尊経A】【陽明A】【内閣】【河野】【高松】【書陵冬】の六本である。全体の特徴としては精撰本である第三類第二種に比べ、基準歌③④⑤⑫⑬全部又はその一部を含む点である。

類	種	通 番 ↓	所蔵者 番号	基準歌													
				①	②	③	④	⑤	既 ⑥	⑦	既 ⑧	⑨	既 ⑩	⑪	⑫	既 ⑬	
一	一	1	尊經 A	×	×	○	○	○	○	×	×	×	×	○	○	○	
		2	陽明 A	×	×	○	○	×	/	/	/	/	/	/	/	/	
	二	3	内閣	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	
		4	河野	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	○	○	○	
		5	歴博	×	○	○	○	×	○	○	追	×	×	×	○	×	○
		6	書陵冬	○	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×	○	○	

二	/	7	東大	△	○	×	×	×	△	○	△	△	△	▲	×	×
		8	蓬左	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×
		9	正版	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×
		10	無版	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×
		11	国資	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×
		12	尊經 B	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×
		13	書陵 A	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×
		14	玉里	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×
		15	桑名	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○	●	×	×

三	一	16	小保	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	
		17	多和	×	○	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×
		18	書陵 B	×	○	×	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×
	二	19	陽明 B	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
		20	書陵雅	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×
		21	書陵兼	×	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×

不可	22	鍋島	/	/	/	/	/	/	×	○	×	×	×	×	×	×
----	----	----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

第一類はさらに基準歌の所収状況により、第一種【尊経A】【陽明A】、第二種【内閣】【河野】【高松】【書陵冬】の二種に細分化できる。

【高松】は基準歌⑦には「追被入之」という注記がある。これは撰集段階において⑦を追加したことを示しているものではなからうか。

第二類に属す伝本は現在【書陵A】【尊経B】【蓬左】【国資】【桑名】【玉里】【正版】【無版】【東大】の九本である。全体の特徴は、精撰本である第三類第二種に比べ、基準歌⑧⑨⑩を含む点である。また、基準歌⑪の所収場所位置が第一類とは異なっていることも注目すべき点である（第一類は一一〇三の次。第二類は一一〇四の次）。ここに【正版】【無版】の両版本が位置していることから最も流布した流布本系統本と位置付けることができる。また、【東大】は基準歌①⑥⑧⑨⑩⑪を小字書入で有するが、これはおそらく精撰本である第三類第二種本を底本とし、さらに第二類本と校合を行ったことを示しているのであろう。よって【東大】は精撰本と第二類本とが接触した結果発生した伝本といえる。

第三類に属す伝本は現在【多和】【書陵B】【小保】【鍋島】【陽明B】【書陵雅】【書陵兼】の七本で、さらに第一種【多和】【書陵B】【小保】、第二種【陽明B】【書陵雅】【書陵兼】の二種に細分化できる。

第三類第一種は精撰本である第三類第二種に見えない基準歌①③⑤の一部を含む伝本である。おそらく【多和】

【書陵B】【小保】とも、精撰本と他本の接触により一、二首復活してしまったのであろう。精撰本に比べ数首多く有しているものの精撰本には限りなく近いと判断し精撰本系統本として位置付けた。

第三類第二種は基準歌①③④⑤⑥⑧⑨⑩⑪⑫⑬の二一首をすべて含まず、前掲第三類第一種より精撰度がさらに高い系統で精撰本と位置付けられる。特に【書陵雅】【書陵兼】はそれぞれ先に示した奥書を持つ（本稿「二、調査対象伝本」の20・21参照）。奥書から【書陵雅】【書陵兼】とも、親本は、応仁の乱後後嵯峨院の命によって書写された文明新写の禁裏官庫本によっていることがわかる。【書陵雅】【書陵兼】本文は、（一）奥書からおそらく当時考えられる善本数本を校合した結果作成されたのであるといえ、両本とも校合本（研究本文）ではあるものの『新後撰集』伝本中でも比較的良い本文をもっていると思われる。

位置付け不可能とした【鍋島】は、下冊のみの残欠本で、下冊のみの基準歌の所収状況のみでは位置づけが困難である。ただし、下冊のみの所収状況を見る限りでは、第三類の「第一種」か「第二種」に属す可能性が高い。

以上が、各類の特徴と位置付けである。

## 四、系統分類における問題点

大別三系統に分類した時、第三類第二種を精撰本と位置付けることに異論はないと思われる。系統分類上の問題は第一類と第二類の先後関係である。前掲系統分類表をみるに、基準歌③④⑤⑫⑬に注目するならば「第一類↓第二類」といえるが、基準歌⑧⑨⑩に注目すると「第二類↓第一類」と逆の結果が得られる。

第一類・第二類とも撰集過程を反映している伝本とは限らず、他本との接触により発生した校合本系統本である可能性もある。校合本の場合、書写者による取捨選択が行われることにより、その所収状況は撰集過程のある段階を示すものではなく、なってしまう場合が多い。

もし、第一類・第二類どちらか、あるいは両方が校合本であった場合、撰集過程を反映した先後関係を考えることはできない。

第一類は写本群であり、第二類は版本を中心とした版本群である。【正版】はどのような系統の本文によっているのかは現在不明であるが、【正版】全体をみると、小字書人、イ本注記などがみえ他本との接触がみられる。このことから【正版】は校合本といえる。校合本だからといって、第一類・第三類にみえない⑧⑨⑩を勝手に入集させ【正版】の版下を作成したとは考え難く、⑧⑨⑩は撰集過程のある段階に存在していたと考えることが妥当であろう。



もし、精撰本にみえない①③④⑤⑥⑧⑨⑩⑪⑫⑬の一首すべて含む伝本が存在していた（未調査伝本中にあるかもしれない）と仮定するならば、第一類・第二類のどちらか、あるいは両方が伝本の接触によって発生した系統本と考えられ、先後関係を解くことは可能かもしれないが、調査し得た伝本にこのような伝本が存在しない以上、現存伝本によって考えなければならない。

この第一類と第二類の先後関係の問題については、基準歌の作者の閲歴、基準歌の除棄順、作者表記・官位表記異同、本文異同等いくつかの視点からの考察を進めている段階であり、結論を得ていない。

## 五、おわりに

『新後撰集』伝本は、基準歌の有無によると、大別三類に分類でき、第三類第二種が精撰本であることを述べた。しかし、第一類と第二類の前後が不明なままである。第一類が第二類に先行すると誤解を招きそうであるので、最後に、第一類と第二類の先後関係については現在不明であり、本稿で示したものは一応の系統分類に留まっているということ述べておく。

第一類と第二類の先後関係については、先に述べていくつかの視点からの考察により結果が得られ次第、別稿において報告したいと思う。

〈注〉

- 1 浜口博章氏「新後撰和歌集本文校定私按」、『中世和歌の研究―資料と考証―』（新典社研究叢書32）の内）新典社 平成二（一九九〇）年三月（初出は『日本文学の伝統と歴史』桜楓社 昭和五十（一九七五）年一月）
- 2 久保田淳氏編『吉田兼右筆十三代集 新後撰和歌集』解題 笠間書院 平成八（一九九六）年六月
- 3 樋口芳麻呂・久保田淳・福田秀一・井上宗雄各氏編 私家版 昭和三十四（一九五九）年十月。
- 4 和歌史研究会編 私家版 昭和四十一（一九六六）年五月。
- 5 総歌数はその伝本が有する和歌を対象とし数えた。よって詞書・作者が存在していても、和歌がない場合は、一首と数えなかった。